

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370651

研究課題名(和文) 英語多読における形成的評価の活用研究

研究課題名(英文) Applications of Formative Assessment in EFL Extensive Reading Class

研究代表者

神田 みなみ (Kanda, Minami)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：20327125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語多読プログラムの成果向上をめざして、形成的評価システムの構築と検証を行うことが目的であった。学習期間中に継続的に形成的評価を行い、学習者である学生自身も関わらせた結果、自律的学習を促進する効果が見られた。さらに、英語多読授業における形成的評価に向けて、学生スマートフォンの有効的活用および専門に関連したジャンルの英語多読用図書の効果的導入も検証された。本研究期間内では形成的評価を授業評価に直結させることについては結論を得られなかったが、指導上の有用性は示された。

研究成果の概要(英文)：With the aim of providing a more effective extensive reading class, this study attempted to examine formative assessment techniques for measuring student progress. For students to take greater responsibility for their learning through extensive reading, two factors were found to be essential: applying systematic formative assessment and engaging students in the assessment process. In addition, the utilities of personal smartphones as well as non-fiction reading materials related to students' career goals were explored. Although how to incorporate formative assessment techniques for grading still needs further research, formative assessment processes provide helpful guidance and may lead to more self-regulated and autonomous student learning.

研究分野：英語教育

キーワード：多読 英語 リーディング 形成的評価 グレイデッドリーダー ノンフィクション スマートフォン

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語多読の広がり

本研究の研究代表者は、英語多読のインプット量を重視する「英語 100 万語多読」を提唱してきた(酒井・神田 2005)。さらに、多読支援の一環として、英語話者向けの児童書や英語学習者向けの段階別英語図書(グレイデッドリーダーズ)を総語数と読みやすさレベルとともに紹介するブックガイド(古川・神田他 2005, 2007, 2010, 2013)を出版し、一般英語学習者向け学習雑誌『多読多読マガジン』(隔月刊)にて、多読に向けた英語図書の紹介を行っている。

英語多読用図書シリーズの一冊あたりの総語数情報が蓄積されてきたことに加えて、読了語数を学習者が記録してゆくことが、多読の励みになるだけでなく、指導者上の有益な情報であることが認知されてきており、100 万語多読を実践する英語多読プログラムを導入する大学、高専、高校、中学校は増えている。

こうした英語多読授業、英語多読プログラムの全国的な広がりの中、多読に関する学会・研究団体も設立された。日本多読学会の 2004 年の設立に続き、JALT(全国語学教育学会)の最大の会員数を誇る多読研究部会 ER SIG、世界多読教育学会 World Congress on Extensive Reading が結成・開催され、多読研究は国内外で盛んに行われている。

(2) 英語多読授業の評価

学習者一人ひとりが個人の英語力、興味・関心に基づいて英語図書を選び、読んでいく 100 万語多読は、読了語数、読みのスピード(Fluency)テスト、シャドーイング、読書レポートなど様々なアクティビティを通して、評価を行うケースが多い。評価についての研究発表では、共通の達成度テストや期末テストで多読の伸びをはかる困難さが報告されている。

クラスレベルではなく、大学・学校レベルでの多読プログラム、多読カリキュラムが導入されるようになり、ますます多読評価システムの構築が必要な状況となっている。

(3) 形成的評価の重要性

英語多読は継続により自律的英語学習者の育成をめざすものであり、教師からの評価だけでなく、自己評価にもつながる形成的評価システムが求められている。近年盛んになってきた読了語数により多読のインプット量を測る定量データを形成的評価とつなげる点にある。

多読の継続期間に加えて、インプット量の増加がどのように形成的評価に含まれる評価指標に反映されるかは、非常に興味深いものがあり、また学習者がどのように伸びを示すかの示唆となる。

2. 研究の目的

本研究計画は、英語多読プログラムの成果を反映する評価指標を検証し、形成的評価システムの構築を行う。具体的には、

- (A) 英語多読プログラムの実践例の調査、
- (B) 先行研究の検証、および
- (C) 実証的研究実施

を通して、

- (i) 評価可能な目標の検討、
- (ii) 評価項目および技法の決定、
- (iii) 評価指標の検証、

を繰り返し、読了語数を含む英語多読の形成的評価システムを構築する。

3. 研究の方法

(1) 英語多読授業

本研究の研究代表者は、関東圏にある私立大学、公立大学、および私立短期大学において英語多読授業を実施した。高瀬(2010)が挙げる英語多読指導の三大ポイント、つまり、

Sustained Silent Reading

(授業内読書)

Start with Simple Stories

(最初はやさしい話から)

Short Subsequent Tasks

(最少の読後課題)

を重視した。課外での多読も推奨したが、特に多読開始時に教員のガイダンスのもと、多読用図書を目の前において多読の仕方と同時に選書方法を確認できること、そして多読の時間を確実に充分にとることが効果的であるためである。

また、授業においては「多読三原則(酒井・神田, 2005)」により、

1) 辞書はひかない、

2) 分からないところは飛ばす、

3) つまらなくなったらやめる、

を示して、辞書を必要としない短くやさしい本を読むことから多読を始めることを学生に勧めた。まず、日本語を介さずに英語を読むことと、読みの流暢さを体感すること、そして重要語、頻度の高い単語・表現を確実に身につけることが重要であるためである(神田, 2014a, 2014b; 古川・神田・柴田・黛・西澤, 2017; 古川・神田・黛・西澤, 2018)。

当初、本研究は大学生による英語多読の長期継続を視野に入れていたが、研究期間 2 年目で研究代表者の所属研究機関が変更となり、調整を余儀なくされた。具体的には英語多読環境を新たに整える必要があり、さらに、1 年以上の多読授業を対象としていたものを、半年の一学期つまり 3 ヶ月程度の短期多読授業に限定することとなった。

(2) 英語学習者

英語多読授業の履修者は大学生・短期大学生の 1 年生乃至 2 年生であり、授業は週 1 回 90 分、一学期のみで授業 15 回であった。授

業中 60 分程度、学生が一人一人自分で本を選んで多読をする時間をとった。学生には英語多読の記録（題名、シリーズ名とレベル、読みやすさレベル、総語数、簡単な感想コメント）を記録させた。

(3) データ収集と倫理的配慮

本研究では、研究代表者が所属する大学、短期大学の英語多読授業での、主に教員の観察記録を質的データとして用いた。授業期間が短期間に限られたこと、英語多読用図書の購入を含む多読環境整備に時間を要したこと、等の外的要因により、学生アンケート、インタビュー、読書記録の分析など、個人情報に含まれるデータの収集は行わず、倫理審査、結果的に倫理審査を必要としなかった。読書速度記録等のデータは連結不可能匿名化された情報として用いて、他の観察データとの関連性は調査対象に含めなかった。

(4) 学生スマートフォンの活用

研究調査中に出てきた問題は、形成的評価指標を実際に授業で用いる際の技術的な問題および実施可能性であった。研究代表者の所属研究機関の変更により、教室環境の整備は切実であり、また学期期間中に複数回の形成的評価の実施は、教師が一括して行うのではなく、学生が個々に評価測定を行い、その記録を管理することで効率的に実施でき、また学生にも即フィードバックを与えることが期待された。

(5) 形成的評価の項目・指標

本研究期間内に実施した、英語多読授業の形成的評価は次の通りであった。

- 1) 読了語数
- 2) 読了冊数
- 3) 読書スピード (Word per Minute)
- 4) 語彙サイズテスト
- 5) シャドーイング

4. 研究成果

(1) 学習指標としての形成的評価

形成的評価の具体的な指標としては、読了語数、読了冊数、読書スピード、語彙サイズテスト ((Vocabulary Size Test) 等を用いた。個別指導に使用した後は、研究データとしては連結不可能匿名化したため、相互の関係は研究対象からは外した。

語彙サイズテストについては語彙サイズが他の学生よりも極端に少ない場合、多読当初は他の学生よりも丁寧な読み方が必要という示唆が得られ、基本語彙を身に付けていることが大学生での英語多読の導入期には重要と思われる (神田, 2016b)。ただし、本研究対象となった学生のごく一部であり、どの程度の語彙サイズが閾値 threshold となるかは、本研究では分からなかった。

読書スピードは個人差が大きく、3ヶ月の

短期間で大きな向上は示されなかった。また英文パッセージの難易度・長さにより大きく変化し、英語多読の成績評価指標としては適切か疑問が出た。ただし、多読を誤解しての読み飛ばしを避けるという指導上の効果は見られた (古川・神田, 2014)。

結果として、形成的評価には教員が学生の多読状況を把握することに加えて、学生自身が多読状況をモニターして振り返ることで、学生が自己学習や課外の英語多読についてより自律的に検討や調整することにつながった。

(2) 学生スマートフォンの活用

研究期間中に学生のスマートフォン所有率がほぼ 100% となった。英語多読授業内で形成的評価を行うためには、多読時間を減らすことなく効率性が求められる。十分な ICT 施設がなくても、普通の教室でも、また学習用モバイルデバイスが使用出来なくても、学生のスマートフォンを代わりに活用することができた (Kanda, 2016a)。また、学生自身がその結果を記録して、管理することで、学習ポートフォリオのようになり、学習振り返りにつながった (神田, 2017)。

さらに、学生スマートフォンの活用は、朗読音声の利用などの授業内の英語図書に関するアクティビティを可能にし、シャドーイングの録音など定期的に行うことで、形成的評価につなげることを可能にした (Kanda, 2018)。スマートフォンの活用例を以下に挙げる。

インターネット機能

- ・朗読音声 MP3 ダウンロード利用
- ・オンライン語彙サイズテスト
- ・オンライン辞書 (発音の確認含む)

ストップウォッチ機能

- ・読書時間測定

計算機能

- ・読書時間から読書スピード計算

カメラ機能

- ・多読記録を撮影して、提出
- ・オンライン語彙サイズテストの結果記録と送信

録音 (ボイスメモ) 機能

- ・学生のシャドーイングの録音
- ・学生の読み上げ朗読の録音

英語授業中の学生個人のスマートフォンを活用するには、使用目的と時間を限定することにより、英語多読への集中を妨げる弊害を防ぎ、教育的効果を上げることが分かった (Kanda, 2017b)。大学生のスマートフォン所有率がほぼ 100% となっている現在、インターネット環境や ICT 環境が恵まれていない教育機関や教室において、スマートフォン活用は有効な手段だと思われる (Ueda & Kanda, 2017)。

(3) 専門につながるノンフィクション

本研究期間中に新たに多読英語図書環境をつくる必要があった。多読導入時に適した短くて読みやすい英語の本は以前はフィクション、物語系が大部分であったが、ここ数年で欧米の学校教育がよりノンフィクションを取り入れる教育指導に移行している流れの中、新たに多数のノンフィクションのリーダーが出版している状況であることが分かった(神田, 2017)。

学生の専門分野につながるノンフィクションの読み物を多読授業で取り入れることを試みた。ノンフィクションの多読とフィクションの多読はかなり異なり、指導もそれに応じて変わる。読書分野による形成的評価の指標の検討が望まれることが示唆された(Kanda, 2017a)。

(4) まとめと英語多読指導上の示唆

本研究は、英語多読プログラムの成果向上をめざして、形成的評価システムの構築と検証を行うことが目的であった。学習期間中に継続的に複数の指標を積み重ねてゆく形成的評価は自律的学習を促進する意味もあり、英語多読において重要である。

当初の計画の調整に時間を要し、研究期間を1年間延長し、結果的に、特に英語多読において重要な多読開始時にしぼることにより、英語科目授業における多読導入期に有用な示唆を得ることができた。

所属研究機関の変更による英語多読用図書の整備に加えて、教育・研究環境も大きく変わったが、学生のスマートフォンを活用した形成的評価指標を検討することで、本研究に新しい視点を加えることができた。また、職業志向性の明確な学生に対しての専門に関係するジャンルの多読用図書の影響も検討に加えた。そして、イギリス・アメリカでのノンフィクション系レベル別学習図書の出版の急増を背景に、保健医療系を専門とする学生への英語多読についての検証も行った。

英語多読授業において、きめ細かい指導が望まれるが、形成的評価に学生が加わることにより、学生自身が自律的に英語多読の進捗、そして学習を振り返ることとなり、より自律的な学習者となる橋渡しとなることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

古川昭夫・神田みなみ・黛道子・西澤一(2018). たくさん読むにはコツがいる! ゼロからの英語多読. 多読多読マガジン, 67号, 10-34. 依頼有

Ueda, M., & Kanda, M. (2017). Japanese university students' attitudes toward the usage of social media in autonomous English study. 異文化研究, 13, 45-48. 査読有

古川昭夫・神田みなみ・柴田里美・黛道子・西澤一(2017). 英語のスタミナUP! 始めよう! 英語多読. 多読多読マガジン, 61号, 14-35. 依頼有

[学会発表](計8件)

Kanda, M. (2018). Smartphones as learning and assessment tools in EFL extensive reading. TESOL 2018 International Convention. (アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ)

Kanda, M. (2017a). ER and ESP: Nonfiction readers for health sciences majors. The Fourth World Congress on Extensive Reading. (東京・東洋学園大学)

神田みなみ (2017). ノンフィクションのリーダーシリーズを用いた英語多読の可能性. The Fourth World Congress on Extensive Reading 日本語部門・日本多読学会共催. (東京・東洋学園大学)

Kanda, M. (2017b). Using Smartphones in the EFL Extensive Reading Class. The Fourth World Congress on Extensive Reading. (東京・東洋学園大学)

神田みなみ (2016a). 英語授業におけるスマートフォンの活用 英語多読の形成的評価に向けて. 国際異文化学会第18回年次大会. (東京・立正大学品川キャンパス).

神田みなみ (2016b). 英語多読の形成的評価 読書スピード、語彙テスト、読書記録. 日本多読学会年会. (山口・徳山工業高等専門学校).

神田みなみ (2016c). スマホを活用した英語多読授業の試み. 日本多読学会年会. (山口・徳山工業高等専門学校).

古川昭夫・神田みなみ (2014). 多読語数・年月と多読レベルと、英文の読解速度の相関. 日本多読学会年会. (東京・SEG).

[図書](計2件)

神田みなみ (2014a). 読みやすくおもしろい人気の学園シリーズ Foundations

Reading Library (FRL). 多聴多読マガジン編集部. 『多聴多読マガジン別冊 英語の多読最前線』(コスモピア). 166.

ロブ・ウェアリング, 神田みなみ(翻訳)(2014b). 日本における多読多聴の指導. 多聴多読マガジン編集部. 『多聴多読マガジン別冊 英語の多読最前線』(コスモピア). 90-100.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神田 みなみ(KANDA, Minami)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授
研究者番号：20327125